



2008年12月8日発行

■編集・発行

北海道火山防災サミット実行委員会2008十勝岳地方実行委員会

■事務局

NPO法人環境防災総合政策研究機構

〒060-0001

札幌市中央区北1条西8丁目2-39

日宝大通ビル8F

Tel. (011) 271-2663



災害教訓と減災まちづくりのあゆみを次世代へ



十勝岳の山麓は十勝岳噴火で大きな災害を受けた経験があります。とくに大正泥流災害は積雪地域の典型的な噴火災害事例でした。

このワークショップは過去の大災害の教訓をどのように伝えてきたか、それから20年前の噴火でどのように活かされたか、そしてこれまでの減災まちづくりに活かされてきた教訓などについて振り返り、未来の安全まちづくりのあり方を考えることを目的として開催されました。

Volcanic Disaster Reduction Summit 2008 in Tokachidake SUMMIT NEWS LETTER

2008年11月15日（土）【プログラム】

13:00 開会挨拶

北海道火山防災サミット2008地方実行委員会副委員長 高橋 清(北見工業大学准教授)
地元自治体挨拶 上富良野町長 尾岸 孝雄

13:10 第1部 講演「災害教訓」

コーディネーター: 宇井 忠英(北海道大学名誉教授)
演者: 伊藤 和明(中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会座長)
南里 智之(北海道建設部土木局砂防災害課)、佐々木 修司(大正泥流経験者子孫)、一瀬 啓恵(北海道大学および室蘭工業大学非常勤講師)

15:00 第2部 パネルディスカッション「減災まちづくりのあゆみ」

コーディネーター: 新谷 融(北海道大学名誉教授)
パネリスト: 寄谷 弘(上富良野町住民会連合会会長)
成田 政一(上富良野町郷土をさぐる会会長)
服部 久和(上富良野町総務課長)
三原 康敬(上富良野町消防署署長)
野崎 孝信(上富良野町総務課基地調整室長)
座間 文男(陸上自衛隊上富良野駐屯地)
笠置 哲造(元旭川土木現業所富良野出張所長)

16:30 閉会



主催: 北海道火山防災サミット2008十勝岳地方実行委員会

共催: 十勝岳火山防災会議協議会

会場: 上富良野町公民館(北海道空知郡上富良野町富町1丁目3-25)

第1部 講演「災害教訓」

宇井先生は、過去の災害から得られた教訓やその後の災害軽減に向けたまちづくりを改めて振り返り、山が静かな今こそ将来の来るべき噴火災害に備えることが大切と考え、コーディネーターとして第1部を企画しました。

伊藤先生は、1926年十勝岳泥流を含む我国の災害の教訓継承調査報告編纂の座長として、この地域の火山防災ハザードマップは、全国の活火山地域の防災モデルと言ってもいいと評しました。



南里さんは、北海道職員として過去の十勝岳噴火の被災者の話をもとに、泥流の再現CG映像を制作しました。泥流が襲ってくる迫力ある映像を見ながら、当時の被災状況を説明しました。

佐々木さんは、1926年の泥流災害で祖父と父が巻き込まれた話から、一家全員が無事に避難できたのは、日頃からの家庭防災教育があったからと語り、体験者の子孫として日々の災害の備えが重要と話しました。

一瀬さんは、上富良野の泥流災害の被害は莫大であったこと、上富良野の人々が当時の村長等と共に大変な努力で復興を果たしたことを、当時の記録や郷土誌などからその概要を紹介しました。

日本の災害史に残る十勝岳大正泥流の教訓は、それに関わった様々な人々の思いとして80年以上経過した現在に描き出すことで、改めて地域に残していく貴重な財産に位置づけられました。

Volcanic Disaster Reduction Summit 2008 in Tokachida SUMMIT NEWS LETTER

第2部 パネルディスカッション「減災まちづくりのあゆみ」



上富良野・中富良野・美瑛の町がともに被災を受け、それぞれが未来に向けたまちづくりを再開しました。地元それぞれの知恵が様々なところで生かされてきて、それが一体どんな姿になりつつあるのか、あるいはこれからなろうとしているのか。またその中に今まで語り継がれてきた教訓とは。

これからのまちづくりに、そして未来の住民たちにこれらの教訓をどうつないでいくべきなのかについて、話し合われました。

コーディネーターの新谷先生は、上富良野の開拓から1926、1962、1988

年噴火とその間の地域で行われた、災害を考えたまちづくりを説明し、これに関わった方々のそのときの思いや考えを聞きながら、住民達の状況や具体的な減災活動について意見を交換しました。

上富良野で暮らす人々が、十勝岳の噴火災害を軽減するためにどのような思いでまちづくりを行ってきたのかを、これからのまちづくりを担う次世代に伝える貴重な時間となりました。

